

文図の効用

「父ちゃんの風」のばあい

ぼく達が、読みの指導の中で「文図（文の分析図）」を使うようになって二十年がたちました。

その間に、文図が一人歩きをして、まるで読みの授業の目的が文図を書くことにあるようにとらえられることもあったようです。また、「詳細な読解に偏らない」という主張の中で、時代遅れのようにとらえられている節もあります。にもかかわらず、今でも、何人も先生が、文図を使った授業をし、豊かな読みの実践をしていると聞きます。それは、きっと、文図には、先生の個性をこえた一般的な力があるからだといえます。ただ、この文図について、まったく知らない先生や、よくわからない先生も増えてきていると思われるので、ここで、あらためて文図について整理しておきたいと思います。

読みの基本

ぼく達は、「文学作品を読む」基本的な段階を、「文を映像化し感情化すること」ととらえてきました。とすれば、文に書いてあることを書いてあるままに読むことが必須になります。文を解釈するのではなく、文を読むのです。

文は、現実を表す最小の単位です。ですから、「文は、ひとつのできごとやありさまをさしめしています」という規定が当てはまります。ところが、文は、ただ、できごとなどの現象を映し出すだけではなく、感情＝評価的な側面も含めてさしあらわしています。とりわけ、文学作品のような場合、そこに書かれている文のひとつ一つに、その両面が反映しています。それは、一文だけでもとらえられることもあれば、文脈の中であらわれることもあります。

そうした両面の表現を、文はなっているのです。

ところで、「できごと」を文があらわしているというのはわかるとして、「感情＝評価的な側面」は、どのようにあらわしているのでしょうか。「感情＝評価的」だからといって、感情を表す直接的な表現がなされているわけではありません。むしろ、すぐれた文学作品では、安易な感情表現はなされていないものです。「できごと」の積み重ねの中で、「感情＝評価的」な側面も表現しています。これは、作品全体をおした中でなされているのですが、ひとつ一つの文においても、同様のことが当てはまるのです。それは、単語の選択や、語順の選択や、文法的な選択によってあらわされます。また、文脈の中では、できごとの選択とどうかたちでもあらわれるでしょう。

こうした現象は、べたの文をそのまま読んだのではなかなかとらえにくいものです。そのままでは、読み手の感性や言語感覚、言語の知識にたよらざるをえません。ましてや、読み手が子どもである場合、特にむずかしくなります。指導者側がわかりきっていると思っていることでも、わかっている場合が多くあります。また、指導者側の「解釈」や「思い入れ」を容易に受けいれてしまうことにもなりがちです。

「文学作品を読む」ということを「文を映像化し感情化すること」ととらえるなら、こうした読み手の力量に依存したり、指導者側などの主観的な解釈にふりまわされるとい

「これは、受け身の文ですが、同じ内容のできごとを、このようにちがった表し方にする
 ところに、「感情＝評価」的なものが表されているのです。
 かびんが—— わられました。

状況語
 文の中で「じ」「じ」「な」「な」などのために「な」「な」を省略する単語を状況語とします。
 状況語は「な」「な」の後に「じ」「じ」の時、場所、原因、目的「な」「な」を省略して「じ」「じ」
 とすることがあります。

文図では、次のようにあらわします。

(状況語)(主語) (述語)
 朝 すすめが ないていた。
すすめが ————— 朝
ないていた。

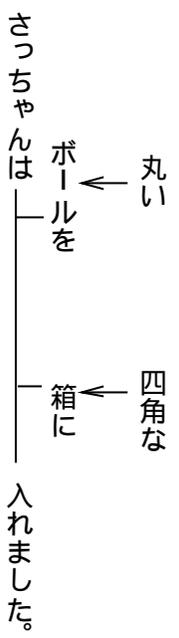
「これは、」時、「場所」をあらわす状況語の場合です。

「原因」「目的」の場合は、もう一つのできごとをあらわすことが多く、主たるでき
 ごととの因果関係がえがかれています。そこで、次のようにあらわすようにします。

(状況語) (主語) (述語)
 「じ」「じ」ここで、先生が にゅういんした。
 「じ」「じ」
 先生が—— にゅういんした。

規定語
 文の中で「じ」「な」「な」の後に「な」「な」を省略する単語を規定語とします。
 規定語は主語や補語や状況語なしの詞として「な」「な」の部分を「じ」「じ」としてあらわす
 規定語のちがわりは「な」「な」です。

これは、連体修飾語にあたる文の部分です。
 文図では、次のようにあらわします。くわしくする部分なので、矢印であらわします。
 (主語) (規定語)(補語) (規定語)(補語) (述語)
 さっちゃんは、 丸い ボールを 四角な 箱に 入れました。



だんだんと、文の構造が視覚化されてきているのがわかります。どの部分が、何をくわ

しくしているかがはっきりとわかります。

修飾語

文の中での「この」「あの」「この」「あの」などの単語を修飾語とします。修飾語は述語で

これは、連用修飾語にあたる文の部分です。

文図では、次のようにあらわします。やはりくわしくするので、矢印にします。

(主語) (修飾語) (述語)

かたつむりが ゆっくり はう。

かたつむりが——はう。
← ゆっくり

独立語

文の中で主語や述語や補語などで直接むすびつけているものがあります。「これを、独立語とします。独立語は文と文とのつながり(接続語)や話し手の気持ち(陳述語)や、つけたえなどをあらわします。

これは、まさに規定どおりで、どこかの文の部分と結びついているものではないので、きまった文図のあらわし方はありません。ただ、子どもたちにわかりやすいように、工夫すればいいでしょう。

以上が、主たる文の部分で、それに対応した文図の書き方を示してきました。

これは、原則的なものであって、実際の文にあたると、複雑な文がたくさんあります。また、以上に示したような単文よりも、重文、複文が多くあります。それでも、よく見ると、ほとんどは、こうした文図にすることができるようのです。

文図の効用

以上のように、べた書きにした文を文図にすれば、何について書いてあるのか、どこがどこをくわしくしているのかなどが視覚化されます。それが、直接的な読みの手がかりとなります。

ただ、気をつけなければいけないのは、「読む」というのは、「文を映像化し感情化する」ということですから、文図にすること、つまり文の分析に夢中になるがあまり、読みではなく文法の学習のようになる傾向が生まれることです。これは、まさに文法の学習時間についていねいにやればよいことです。「読む」ための手助けとしての文図ですから、子どもたちにわかりやすい文図がかまいません。文の部分の書き表し方の原則をふまえながら、長い文では、厳密に細かく分ける必要はないでしょう。文の部分に分ける方が適当かどうかは、その単語のないう意味の重さのようなもので判断すればいいでしょう。もちろん、これも、教材研究の質によって、軽重が決まってしまうのですが。

実際の読みでは……

繰り返し述べるように、文図ができあがれば、読むことができたということにはなりません。文図は手がかりです。文図によってうかびあがってきた文の表現性などを明らかにし、それをとらえることで、文に描かれている映像や感情を読むこととなります。

その始めは、文に書かれている「こと」が「を」読むことです。何が書かれているのか、文図を手がかりにしなが、「事実的」な側面をはつきりさせます。そして、「感情的」な側面をとらえます。感情は、できあがった映像からも浮かびあがってきますが、文の表現性の中に多くこめられています。それは、最初に述べたように、語順であったり、単語の選択であったり、文法的ないまわりの選択であったりします。作家は、どういう表現がもっとも適しているかを吟味し、選び、書いているものです。その選択を手がかりにしていきます。

「父ちゃんの凧」のばあい

学校図書の五年生の教材に、「父ちゃんの凧」という長崎源之助の作品があります。いわゆる平和教材ですが、加害の側面もさりげなく取り上げているまれな作品だといえます。ただ、作品全体が「わたし」の語りで通されているため、一般的な物語の地の文とは異質なものになり、会話文の特徴が全体を覆っています。その点を考慮して読んでいくことが必要な作品です。

では、いくつかの文を例にとりながら読んでみましょう。

どうです、りっぱな凧でしょう。 わたしの父が、作ったんです。

これ、わたしの、たからです。

冒頭の部分です。文自体はむずかしいものではないように感じられますが、会話文的に書いてあるので、その場の状況をおぎなう必要が出てきます。普通の地の文であるなら、必要なものや背景、状況について書いてあるものですが、会話文では、もともとが場面やその場の状況に依存して成り立っていますから、書かれていないことがあって当然ということになります。それをおぎなわなければ、読み手にはよくわからないということになります。

どうです、りっぱな凧でしょう。

聞き手（読み手）に問いかけている文です。文図にすれば、次のようになるでしょう。

この文のように、主語がはぶかれている文のばあい、述語から考えます。日本語には、述語は最後に書くという原則がありますから、それさえわかれば、述語を見つけることは容易になります。そこから、主語を補ってみます。

どうです、りっぱな凧

（これは）——凧でしょう。

文図としては、入り組んだものではありませんが、何とも曖昧な感じがします。会話文であるがためです。ただ、まず、ここに述べられていることからはっきりとわかることを明らかにします。

まずは、凧があることがはっきりとしています。問題は、その次です。「どうです」¹¹「うだ」の語彙的な意味を調べてみなくてはいけません。すると、「他人に同意を求めたり見せつけたり、何かをするようにすすめたりするのに使う。」¹²という使われ方をすることがわかります（独立語）。¹³ということとは、¹⁴の文は、だれかがだれかに語りかけていて、しかも、同意を求めている、あるいは自慢している気持ちのあることがわかります。つまり、だれかがだれかに凧を見せて、自慢しているという場面であることがわかります。また、「りっぱな」という規定語にも話し手の思い入れがあることがわかります。それは、次のような比較をすることで考えることができます。

- ・きれいな たこ
- ・大きな たこ
- ・りっぱな たこ

前者の二例に比べて、「りっぱな」は、話し手の主観的評価が強くはたらいっているといえます。

* 会話文は、方言におきかえてみるとわかりやすいかもしれません。たとえば、この文のばあいは、「どうよ（どうよ）りっぱな凧じゃろう。」¹⁵と、「どうよ（どうよ）に。誇りしげな気持ちが強く伝わってくるかもしれません。

わたしの父が、作ったんです。

これも、文図にするのはむずかしくありません。何を作ったのかが書いてありませんが、「この凧を」とおぼなつのはさほどむずかしくありません。ただ、分かり切っているようなことでも、ていねいにおさえていかないと、頭の中に絵がつかんでこない子もけっこういるものです。さて、「この文ですが、」ことから「としては、」わたしの父が、この凧を作った」ということになります。ことからとしては簡単ですが、ちょっと、たちどまって考えてみたいことがあります。それは、「父が凧を作る」ということです。しかもその凧は、「わたし」からすれば「りっぱな凧」です。少なくとも、おもちゃのような凧ではありません。そんな凧を「父が作った」というのは、ふつうのことからはいえないでしょう。そこで、もう少しくわしくこの文を読んでみましょう。



文末が、「作ったんです」となっています。ふつうの形になおせば、「作ったのです」になります。これを、次の文と比較してみると、何かちがうことが感じられます。

・わたしの父が作りました。

これをはっきりさせるためには、「の」です。「の」文法的な意味が知りたいところです。「野です」「は、この後も、あるいはほかの作品でもよく使われますから、知っておけば便利です。

おみやげ「のだ」「のです」の用法

ふつうの地の文では、「のだ」「のです」は次のような意味をもっています。

前に述べたことの原因

・じいさんは、思わず、子どものように声をあげて喜びました。一羽だけでしたが、生きていたが、うまく手に入ったのです。

前に述べたことの説明

・夜の間に、えさ場より少しはなれた所に、小さな小屋を作って、その中にもぐりこみました。……えさ場にやってくるがんの群れを待っているのです。

強調 話の転換のきっかけになることがある

・ところが、いよいよ汽車が入ってくるという時になって、また、ゆみ子の「一つだけちようだい。」が始まったのです。

ところが、会話文の中で使われる時は、用法が少し変化します。

会話文での「のだ」「のです」は、相手に教える、説明するという使われ方が多くありません。それは、理由や結果の説明であったりもします。ただ、何でも「のだ」を使うのではなく、話し手が大切だと評価していること（現象の本質的な意味）について「のだ」は使われます。また、地の文のように、話の転換にとって重要だと判断したできごとについても使われます。

*これも、方言で考えるとわかりやすいかもしれませんが、「新しい服を買ってもらったのです」「新しい服を買ってもらったんで」「新しい服を買ってもらったんじゃあ」「新しい服を買ってもらったんで」「新しい服を買ってもらったんよ」いかにも人に教えているということがわかります。

本文にもどりましょう。つまり、の文は、わたしの父が作ったということを、聞き手に教えようとしていることがわかります。父が作ったということが大切なのだと。とする、とりつばな風を自慢するだけでなく、父を誇らしく思っていることが伝わってきます。

これ、わたしの、だからです。

この文も、たいしてむずかしい文ではありません。簡単に文図にできます。

わたしの

←
これ——だからです。

ことごとくとしても簡単ですが、気をつけたい点が二つあります。

一つは、「だから」の語彙的な意味です。「わたしのだからです」にこめられた「わたしの」の思いがあります。また、どうしてこれが「だから」なのかは、物語を全部読んでみないとわかりません。全部読み終わった後に、「だから」の意味を考えると、なかみはさらに具体的に重いものになるはずですよ。

二つ目は、「これ」です。いわゆる「こそあどことば」ですが、案外子どもたちの中に

はわかっていない子もいます。場所・位置関係をあらわすばあいについてと、文脈的な使われ方をするばあいについて、それぞれとりあげて指導する必要があります。また、本文のばあい、「これは」となっていないことも、何らかの表現性があるでしょう。次のように比較してみると、映像的に感情的にも、何か発見できるかもしれません。

- ・これ、わたしの、たからです。
- ・これは、わたしの、たからです。
- ・これは、わたしのたからです。

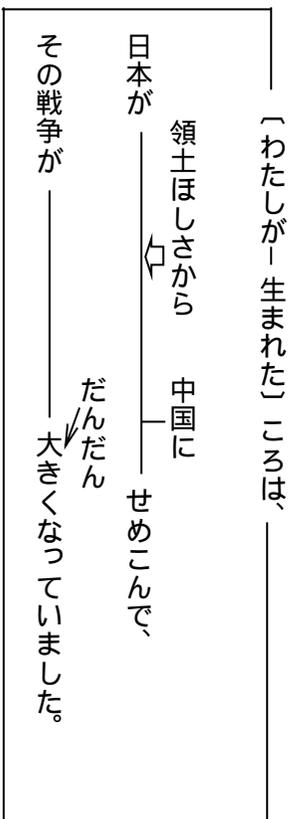
わたしが生まれたころは、日本が領土ほしさから中国にせめこんで、その戦争が、だんだん大きくなっていました。

ご近所でも、八百屋のおじさんや、とこ屋の兄さんや、郵便屋さんなどが、さっそく兵隊にとられたんですって。そして、間もなく父も戦争に連れていかれちゃいました。

物語の中盤です。「父ちゃんの風」は、冒頭の文こそ短いのですが、あとは、一文が長いものが続きます。そうすると、文図が威力を發揮してきます。

わたしが生まれたころは、日本が領土ほしさから中国にせめこんで、その戦争が、だんだん大きくなっていました。

いくつもの文が組み合わさった文です。重文・複文になっています。こうなると、べた書きの文では、何が書いてあるのか整理しにくくなります。子どもたちには、「いくつの文があるでしょう」と考えさせ、それぞれの主述に直線・波線を引かせるなどして、主述をとらえさせたいと思います。それでもわからないばあいは、主文をとらえます。主文の述語は、文の最後にありますから、一番わかりやすいのです。



「わたしが生まれたころは」というのは、時をあらわす状況語です。それまで描かれていた、わたしの誕生にたいしての父や母の幸せそうな姿があった時代のころです。どういうできごとがあったのかが書いてあります。それまでの幸せとは裏腹の社会状況です。この時代背景については、あまり深入りしない方がいいでしょう。六年生の社会の時間にくわしく学習することを予告して、とにかく戦争していたのだという事実をおさえておけばいいかもしれません。この戦争がどんな戦争であったかは、このあとにも出てきます。

ただ、これが侵略戦争であったことがさりげなく書かれています。「領土ほしさから」の「から格」は、原因をあらわします。

・たばこの不始末から、火事になった。

この戦争の原因が、日本の領土拡大であったことが指摘されています。が、ここに踏み込みすぎると、歴史の勉強になってしまいます。どうしてもおさえたいなら、別の時間にきちんと整理して学習すべきでしょう。

ところで、この文には、気をつけておきたい表現が二つあります。

一つは、第二中止めで結ばれた重文です。

おみやげ2 中止めの形でむすばれると(重文のばあい)
「・・・せめこんで・・・大きくなっていました。」

「せめこんで」を「せめこむ」の第二中止めといいます。第一中止めは「せめこみ」です。これは、すべての動詞がそなえている形です。本文のように、第二中止めでむすばれた重文(それぞれに主述がある)には、主に次のような意味があります。

ア、二つのできごとが一つの場面の中に同時に存在している。

イ、さきだつ文がものの全体をのべて、主文(あとの文)がそのものの部分や側面を述べている。

ウ、一つの空間の中に、二つの現象が同時に存在している。

エ、一つの場面の中で、二つの出来事が継起的におこっている。

オ、継起的におこってくる二つの出来事のあいだに、原因・結果の関係がある。

カ、出来事の時間的な関係をあらわしている。

本文のばあいは、エととらえればいいでしょう。まずは中国にせめこむということがあり、その後、戦線が拡大したということです。つまり、戦争が激しさを増したということであり、続いて起きる出来事を必然的なものにしていきます。

もう一つは、「大きくなっている」という形です。このばあいは、純粹な動詞の現在進行形とはいえないかもしれませんが、意味的には「〜している」の意味をになっています。

おみやげ3 現在進行形があらわす意味

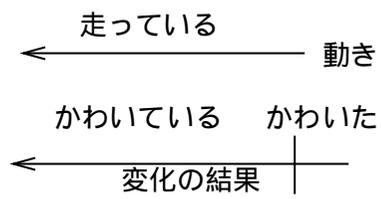
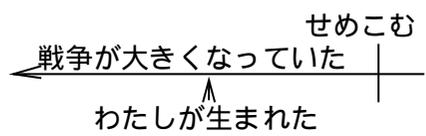
「〜している」は、一般的に現在進行形だといわれます。ただ、現在進行形というと、英語のそれを思い浮かべ、動きが進行しているととらえがちですが、実際には二つの意味があります。それは、動きを表す動詞と変化をあらわす動詞によってちがってきます。

・犬が走っている。

このばあいは、まさに現在、犬が走っているということと、走るという動きが続いていることをあらわします。

・洗濯物がかわいている。

このばあいは、かわくという動きが続いているわけではありません。ぬれていた洗濯物が「かわいた」とい

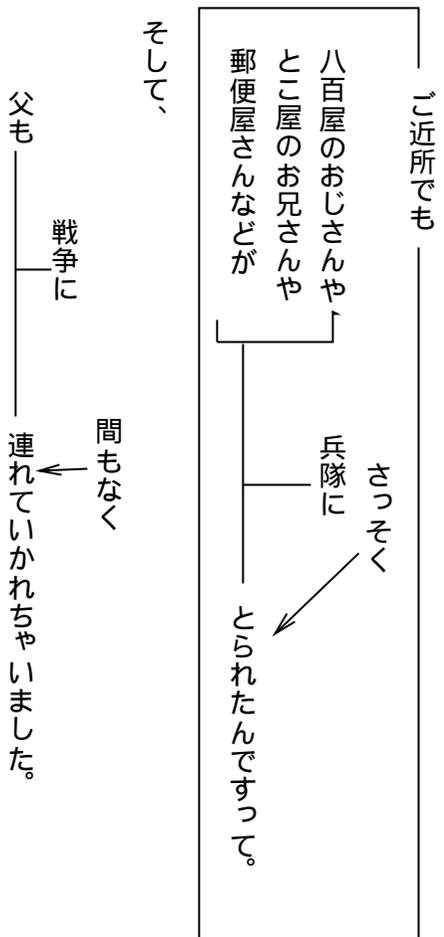


う変化の結果が状態として続いているという事です。

さて、これが物語の中で使われると、出来事の背景をあらわすことが多くなります。本文のばあい、「わたしが生まれたころ」には、すでに中国との戦争は始まっていて、「大きくなくなってた」のです。つまり、戦争が拡大している最中に、わたしは生まれたということになります。

このように、物語の中では、「」として「は、ある出来事の背景として同時に存在していることが多くあります。それがとらえられると、ものがたりは、立体的に読むことができます。そういう点を考慮すれば、文図の書き表し方も工夫することができます。

「近所でも、八百屋のおじさんや、とこ屋の兄さんや、郵便屋さんなどが、さつそく兵隊にとられたんですって。そして、間もなく父も戦争に連れていかれました。



の文には、主語が複数あって、近所のふつうにくらしていた人たちが戦争に行ったことがわかります。ここには、先に取り上げた「のです」が使われています。ここでの「のは、の社会的な状況の結果として、のようになったということを説明しているといえます。つまり、が背景として色濃く存在し、「さつそく」ふつうの人々の生活に影響を与えているのです。

「」では、「連れていかれる」も含めて、受け身の形に注目します。

おみやげ4 受け身の形があらわすもの

受け身の文では、動きの受け手が主語としてあらわれます。「」に、表現性があります。動きのし手ではなく、受け手を主語にすることで、受け手の側に心を寄せることになりま。さらにこのばあいは、「とられる」とる（「連れていかれる」連れていく）という単語の選択によって、有無をいわさない状況であることがあらわされます。「兵隊にとられる」と「戦争に連れていかれる」の表現性の違いも注目すべき点です。また、この動きのし手はだれなのかを明らかにするために、能動文に置きかえてみる必要があります。「とる」で、受け身の文には、どういった内容があるのでしょうか。整理してみたいと思います。

ア、直接対象の受け身

・ 第一走者が第二走者にバトンをわたした。(を格の名詞)

・ バトンが第一走者から第二走者にわたされた。

イ、間接対象の受け身

・ 第一走者が第二走者にバトンをわたした。

・ 第二走者が第一走者からバトンをわたされた。

ウ、もちぬしの受け身

・ 太郎が次郎のかたをたたいた。

・ 次郎が太郎にかたをたたかれた。

エ、めいわくのうけみ(第三者の受け身)

・ きのう、雨がふった。

・ きのう、雨にふられた。

この受け身では、能動の文にはない第三者がはた迷惑をこうむることをあらわしています。この第三者をさしめず主語がはぶかれることが多い。

の文では、さらに注目しておくべき表現があります。「連れていかれちゃいました」です。もとの形にすれば、「連れていかれてしまいました」です。この部分は、複雑に形が合わさっています。「連れる 連れていく 連れていかれる 連れていかれてしまう」この一語一語が検討できれば、なかみはさらにはつきりするでしょう。
こうでは、その中の「〜してしまっ」を考えます。

おみやげ「〜してしまっ」があらわすもの

物語の中では、「〜してしまっ」がよく使われます。この形には、多かれ少なかれ、話し手の感情がこもっていることが多いのですが、一般的には、次のように考えられています。

ア、主体や対象の変化の終了や一定量のものが全部終了することをあらわす。

・ 日がくれてしまわないうちに帰ろっ。

・ 今日の宿題を全部終わらせてしまっ。

イ、話の展開の中で、場面を転換させるような変化や動作が成立することをあらわす。

・ あのはあさんも、とうとう死んでしまっ。

ウ、予期しなかったこと、期待しなかったことがおこることをあらわす。

・ ぼくはあなたにすまないことをしてしまっ。

かなりの割合で、この三つのパターンに分類分けが可能ですが、明確に線引きできない場合も多くあります。本文の「あ、い、う」の意味合いが強く出ていますが、「い」の意味も含まれているように感じます。そこで、感情の側面から、次のような分け方もあります。

1、一人称の場合、自分の行為に対する感情として、次のようなものもある。

ア、意図的な動作の場合、決意のかたさやためらいのなさなどをあらわす。

・ さあ、宿題をしまっぞ。

イ、実現した(する)行為に対して、喜びや満足感をあらわす。

- ・すごいものを見てしまったよ。
- ウ、聞き手に対して、いいわけや非難の気持ちをあらわす。
 - ・ 一生懸命走ってきましたが、遅れてしまいました。
- 2 二人称の場合。相手に対する感情として、次のようなものもある。
- エ、聞き手の動作がすでに実現ずみの場合、非難の気持ちをあらわす。
 - ・ きみは、あの子を傷つけてしまった。
- オ、これから実現する場合、忠告の気持ちをあらわす。
 - ・ 早くしないと、遅れてしまうよ。
- 工、命令形の場合、その行為の実現を話し手が期待している。
 - ・ そんながらくた、捨ててしまえ。
- 3 三人称の場合。第三者に対する感情として、次のようなものもある。
 - オ、再びもどることができない、とりかえしがつかないという気持ちをあらわす。
 - ・ 好きだったドラマが終わってしまった。
 - カ、これからのできごとを、聞き手に対して、非難・忠告する気持ちをあらわす。
 - ・ そんなに強くなりたいなら、ドアがこわれてしまいますよ。
 - 4 つきそい・あわせ文のつきそい文（特に時間をあらわすつきそい文）の述語に使われている場合は、感情的な側面はぎりすてられ、完了だけをあらわす。
 - ・ きみが転校してしまう前に、言っておきたいことがある。

本文は、三人称のばあいには当てはまりません。三人称のばあいには、次のようにも規定することができます。

「第三者の動作・変化・状態の実現に対する、話し手の困惑・失望・不満・慨嘆などの感情が表現されている。ここでは、第三者のかかわるできごとの実現を、自分にとって好ましくないもの、不都合なものとして、否定的に評価している。」
 こうみてくると、本文では、父が戦争に連れていかれたことを、自分にとって好ましくないことと評価していることがわかります。
 「」としてしまう「」が出てきた時に、どの使われかたなのかを検討してみると、気持ちが明らかになるように思います。

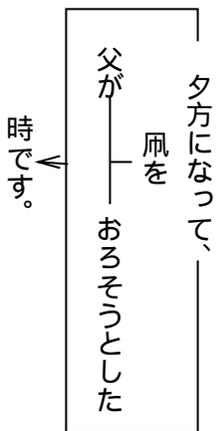
夕方になって父が嵐をおろそつとした時です。 とせん一発の銃音がひびき、たまた父のひねをうらめいたんです。

父はその場にはひたりたおね父の手をはなれた嵐はひもを引きずりながら、ユキももてい井も飛たてておししたそついです。

遠い山なみのみね雪ががやいで、巴御前の嵐は夕焼けにそまじながら、へんくんと小さくなつていきました。

最後の方の場面です。「父ちゃんの凧」の中では、唯一、映像が鮮やかにえがける場面です。それだけに、ていねいに読みたい場面でもあります。(別紙教材研究資料参照)

夕方になって、父が凧をおろそうとした時です。



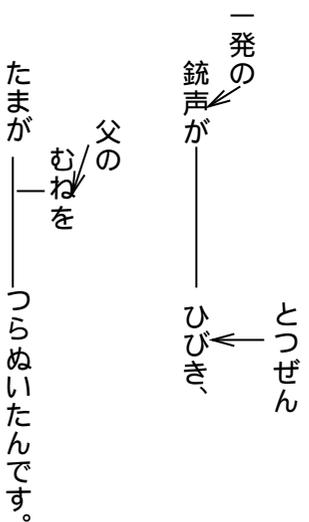
(規定語的なつきそい文。)

(時をあらわす主語なし文。)

「夕方になって」というのは、既出の第二中止めでむすばれた文です。その中の、時間をあらわす用法で、時をあらわす状況語として扱えばいいでしょう。

文全体が時をあらわしています。物語の中で、時をあらわす文があると、何か大きな出来事、話の転換があるものです。つまり、事件がおきるのです。

とつぜん、一発の銃声がひびき、たまが父のむねをつらぬいたんです。



大事件の発生です。

この文は、第一中止めによってむすばれた重文です。

おみやげ6 「第一中止め」でむすばれた文があらわすもの

ここでは、重文(主語が異なる文の並び)のばあいに限定します。

第二中止めでむすばれた重文のばあいは、重文であるにもかかわらず、二つの文には従属的な関係があります。いつぼつ、第一中止めでむすばれると、並列の関係になります。

それは、次の文を比較してみると、何かが違うような感じがすることからわかります。

- ・銃声がひびき、たまがむねをつらぬいた。
- ・銃声がひびいて、たまがむねをつらぬいた。

第一中止めの形で二つの出来事を並べているとき、二つの出来事のあいだには、時間的な先行・後続の関係、同時的な関係がなりたっているのですが、同時的な関係のばあいがきわめて多いのです。その関係を整理すると、次のようにまとめることができます。

ア、二つのものが一つの空間の中に、同時に存在していることをあらわす

- ・ 広場にはトラックがとまり、子どもが二三人遊んでいる。
- ・ 一つの空間の中に二つの現象が同時に存在していることをあらわす
- ・ 朝もやがただよい、空はしだいに黄色い明るさをましていた。
- ・ 一つの場面の中に、二つの活動が同時に存在していることをあらわす
- ・ 人がかけだし、消防自動車も走っていた。
- ・ それぞれの述語が、ものの部分・側面をめぐってできことをえがきだしている
- ・ ガラス窓の色絵も古び、屋根もゆがんでいる。
- ・ 時間的な先行、後続の関係の中にある二つの出来事をあらわす
- ・ 剣の舞はおわり、ダンスがはじまっている。

力、二つの出来事が継起的に生じているとき、先行する出来事が後続する出来事を条件付けているばあいがある

- ・ 半鐘がなりだし、町はにわかになぞうしくなった。
- ・ もちろん、ほかにもあるのですが、代表的なものとしては、以上ようになります。いずれにしても、第一中止めによって並べられた二つの出来事は、対等、並列の関係であって、従属的な関係はほとんどありません。

とすると、本文のばあい、の「たおれ」も含めて、あとの文(主文)があらわす出来事とは独立した出来事だという色合いが強くなります。そうみてくると、もも、そこにあらわされた出来事は、映像化すると、あまりにあっけなく、客観的になってきます。つまり、一発の銃声がひびいたこと、父の胸をたまがつかぬいたことは、同時でありながら、そこにいたものにとつては、それぞれが別の出来事だったということです。それほど突然のことで、二つの出来事を結びつけることができなかつたのでしょう。さらに、それに引き続いて、の出来事がおきます。は、同時的であると同時に、力の継起性をあらわしているともいえます。いずれにしても、その二つの関係に因果を求めるようなゆりのなかつたことをあらわしているといえます。

なお、の文の「」のです「は、既出の、話の転換点として大きな出来事であることをあらわしているでしょう。そこには、当惑や驚きの気持ちがあふくまれているかもしれませぬ。



おみやげ「」しながら「」について

「ひもを引きずりながら」と「飛んでいってしまった」は、別の動きではありません。

「飛んでいく」ようすとして「ひもを引きずって」があります。そこで、「くしながら」を主たる動き（述語のあらわす動き）と同時の動きをあらわします。ですから、文の部分としては修飾語であり、品詞としては副詞的になります。こついうくしながら「のことを副動詞といえます。

同時形としての副動詞には、「よみながら」「よみよみ」「よみつつ」「の三つの形があります。それぞれいかなることができますが、若干ニュアンスがちがうようです。ただ、その点についてははっきりとした意味的ながいは認められません。使用の方として、「よみながら」が標準的で、「よみつつ」がやや古くさい文体の中で使われ、そして、「よみよみ」が主としてはなしことばの中で使われることが多いようです。いずれにしても大切なのは、同時の動きだということです。

も、映像化するときに、二つの動きを一体化して映像化しなくてはなりません。そうしなければ、の文では、風船が飛んでいってしまうような映像をつくる子どもでてくるでしょう。また、の文では、真つ赤な光を受けて（血を連想させます）遠ざかっていく風の映像をつくってほしいと思います。赤い点と美しい光景、今の悲劇的な状況を象徴しています。しかも、遠ざかっているのは、巴御前の風です。

さらに同時形とは別に、でもでも、中止めの形でもう一つの出来事・現象がえがかれています。のばあいは、前述したとおりですが、のばあい（第二中止め）も、「ウ、一つの空間の中に、二つの現象が同時に存在している」にあたるでしょう。

これらを一体化させた映像にしないと、悲劇性はうまれてきません。
「くしながら」のもう一つの用法

同時形としての用法とは別に、「くしながら」には、次のような使い方もあります。
それを目の前に見ながら、どうしても思い出せなかった。

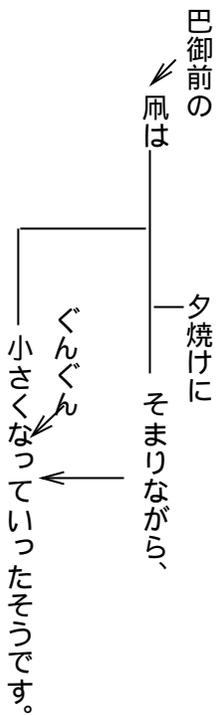
これは、逆接の用法とよばれています。「く」の「く」だけれど「などに近い用法になります。この使い方は、動詞に限らず、形容詞や名詞でもできます。

・せまいながらも楽しいわがや。
・子どもながらしっかりしている。

* 「飛んでいってしまった」について

既出の「くしてしまう」です。このばあいは、三人称ですから、
「第三者の動作・変化・状態の実現に対する、話し手の困惑・失望・不満・慨嘆などの感情が表現されている。ここでは、第三者のかかわるべきことの実現を、自分にとって好ましくないもの、不都合なものとして、否定的に評価している。」

に当てはまります。問題は、こつ評価しているのはだれかということ。ふつつなら、話し手の「わたし」になります。飛んでいってしまったと、伝聞になっています。つまり、評価の主体は、この話をしてくれた吉野さんであり、その場にいた戦友たちだったと考えられます。吉野さんたちの困惑・失望があります。では、何に対しての困惑・失望か。「風は・・・飛んでいってしまった」だけに注目すると、風が飛んでいったのが残念だ、という読みになりそうです。実際、授業の中では、風が執着する子が多くでてくるようです。この失望や困惑は、そうしたものでいいのでしょうか。一連の出来事（実際には、瞬間の出来事です）を映像化しないと、風への思いに矮小化しそうです。



おみやげ 「〜していく」「〜して」

「これもよく出てきています。にもあります。」「〜していく」「〜」に対立するまものとて、「〜していく」があります。」「〜していく」「を」とおのき態「」とおのき相「」〜して行く「を」「ちかづき態」「ちかづき相」といいますが、子どもたちには「」「とおのき」「ちかづき」として提示すればわかりやすいでしょう。

「〜していく」の用法

1、とおのく動きをあらわす

ア、ある動作をしてからとおのくことをあらわす

・ちよっと、うちへよっていきましよう。

イ、ある動作や状態をしながらいくことをあらわす

・母はわたしを病院までおんぶしていった。

ウ、むこうへとおのく移動やはたきかけをあらわす

・三郎は六年生の子にかかっていった。

2、動作や変化のありかたをあらわす

ア、変化の過程が進むことをあらわす

・西の空が赤くなっていった。

イ、消滅の過程が進み、終わることをあらわす

・きえていく白鳥のむれをみおくりました。

3、その時点から(動きがつづく)ことをあらわす

・大丈夫、由美はだれとでもちゃんとくらししていけるよ。

本文の は、1のウだといえますし、 は、2のア、あるいはイのようでもあります。

「〜してくる」の用法

1、ちかづく動きをあらわす

ア、ある動作をしてからちかづくことをあらわす

・パンを買ってこい。

イ、ある動作や状態をしながらくることをあらわす

・むこうから友だちが走ってきた。

ウ、こちらへちかづく移動やはたきかけをあらわす

・ 先生が教室に入ってきた。

・ 海が見えてきた。(これは「見えていく」にはかえられない)

・ おふくろがおくってきたレモン。(ものだけが移動する)

2、動作や変化のありかたをあらわす

ア、変化の過程が進むことをあらわす

・ 西の空が赤くなってきた。

イ、発生の過程が生じ、すすむことをあらわす

・ 草がはえてきた。

* 動きのはじまりにちかいもの

・ 雨がふってきた。

3、その時点まで動きがつづくことをあらわす

・ みんな、がんばって練習してきた。

以上、「父ちゃんの凧」を中心に見てきました。「父ちゃんの凧」のように、長文が多い作品では、文図が効果的になります。文図にあらわせば、少なくとも、いくつの出来事・ことがら文の中に書いてあるかがわかります。また、どの部分をくわしくしているかわかり、その表現性を問題にすることもできます。

本レポートでは、さらに、文法的な意味についても八つ紹介しました。文法的な形がちがえば、意味が変わってくると感じた人もいたのではないでしょうが、それが、文法の選択による表現性です。ここで紹介したものは、ほかの作品でもよく使われているものです。ぜひ、資料として活用していただけたらさいわいです。

・ 先生が教室に入り、子どもたちはおしゃべりをやめた。

・ 先生が教室に入って、子どもたちはおしゃべりをやめた。

・ 先生が教室に入ると、子どもたちはおしゃべりをやめた。

・ 先生が教室に入ってきて、子どもたちはおしゃべりをやめた。

・ 先生が教室に入っていくと、子どもたちはおしゃべりをやめた。

・ 先生が教室に入ると、子どもたちはおしゃべりをやめてしまった。

・ 先生が教室に入ると、子どもたちはおしゃべりをやめていった。

・ 先生が教室に入ると、子どもたちはおしゃべりをやめたのだ。

いったい、何がちがうのでしょうか？